

I. 目的

Bio-T消臭液の毒性を検査する。

ー被実験材料ー

- ・Bio-T消臭液（濾過前の原液）
- ・試験動物：5週齢のICR系雌マウスを日本エスエルシー株式会社から購入し、役1週間呼び飼育を行って一般状態に異常のないこと確認した後、ネート製ケージに各5匹収容し、室温 $23^{\circ}\text{C} \pm 2^{\circ}\text{C}$ 、照明時間12時間/日に設定した飼育室において飼育した。試料[マウス、ラット用固形資料；ラボMRストック、日本農産工業株式会社]及び飲料水（水道水）は、自由に摂取させた。

ーテスト実施機関ー

- ・財団法人日本食品分析センター

実験方法

検体投与量として2,000mg/kgを投与する試験群及び溶媒対照として注射用水を投与する対照群を設定し、各群につきそれぞれ5匹用いた。投与前に約4時間試験動物を絶食させた。体重測定した後、試験群には試験液、対照群には駐車用水をそれぞれ20mL/Kgの投与容量で胃ゾンデを用いて強制単回経口投与した。観察期間は、14日間とし、投与日は頻回、翌日から1日1回の観察を行った。投与後7及び14日に体重測定し、t-検定により有意水準5%で群間の比較を行った。観察期間終了後に動物すべてを剖検した。

II. 実験結果

- 1) 死亡例
いづれの投与においても。観察中に死亡例は認められなかった。
- 2) 一般状態
いづれの投与群においても、観察中に異常は見られなかった。
- 3) 体重変化(表1)
投与後7及び14日の体重測定において、試験群は対象群と比べ体重に差は見られなかった。
- 4) 剖検所見
観察期間終了時の剖検では、すべての試験動物に異常は見られなかった。

* 考察は次ページ参照

Ⅲ. 考察

検体について、雌マウスを用いた急性経口毒性試験(限度試験)を実施した。検体を2,000mg/kgの用量で単回経口投与した結果、観察期間中に異常及び死亡例は認められなかった。したがって、検体のマウスにおける単回経口投与によるLD50値は、雌では2,000mg/kg以上であるものと考えられた。

*参考文献：OECD Guidelines for the Testing of Chemicals 420(2001).

投与群	投与前	投与日	
		7	14
試験群	25.4±0.8(5)	26.5±1.3(5)	27.8±0.8(5)
対象群	25.3±1.0(5)	27.2±0.6(5)	29.3±1.6(5)

体重は平均値±標準偏差であらわした。(単位:g) カッコ内に動物数を示した。